

評価：★★★★★

『#教皇選挙 (Conclave)』(2024 年：エドワード・ベルガー監督) を amazon prime video で視聴した。監督はドイツの映画監督、脚本家。2014 年、映画『ぼくらの家路』がベルリン国際映画祭コンペティション部門に出品されて、国際的な注目を集める。2022 年、映画『西部戦線異状なし』が国際的に高い評価を受けた。原作はロバート・ハリスの小説『教皇選挙』。

本作上映期間中の 2025 年 4 月 21 日にフランシスコ教皇が亡くなったことを受けて、実際にバチカンでも教皇選挙が行われることとなった。これに伴って、本作に対する世間の関心が急速に高まり、世界中で（日本でも）視聴者数が激増したそう。私は amazon prime video 解禁日（2025 年 7 月 30 日）に視聴した。実際に教皇選挙に参加した枢機卿の一部も参考とするために本作を鑑賞したという。

全世界 14 億人以上の信徒を誇るカトリック教会の最高指導者・ローマ教皇が逝去した。そこで首席枢機卿 L が「教皇選挙 (コンクラーベ)」を主宰することになる。世界中から 100 人を超える枢機卿が候補者として集まり、閉ざされたシスティーナ礼拝堂で極秘の選挙が始まる中、水面下では各派閥によるさまざまな陰謀が蠢めていた。女性問題のスキャンダルで対抗馬を蹴落とそうとする者。1 年前から選挙票を買収している者等。そんな中 L は審議の冒頭、即興の説教で「不確実性を受け入れること、確信を持たず常に疑念を抱くものが教会を導くべきである」と枢機卿らに話す（この言葉が、最後に教皇が選ばれた後、視聴者に意味があったのだと悟らせることになる）。そこへ前教皇によって秘密裏にアフガニスタン・カヴール教区に配属され、誰も存在を知らなかった B 枢機卿が現れる (B 枢機卿は前教皇の配慮でスイスのクリニックでの治療予約を直前にキャンセルしていた)。

結論の出ないまま 3 日目に突入する（まさに「根競べ」だ）。L が投票用紙を壺に入れた直後に爆弾がシスティーナ礼拝堂に投げ込まれ、重傷者こそ出なかったもののコンクラーベは一時中断した。この爆発はイスラム原理主義者による自爆テロ事件であること、数百人の死傷者が出ていることが枢機卿団に伝えられた。それを聞いて、興奮した候補者の一人がイスラム教に対する宗教戦争を主張したのに対し、戦地で長らく奉仕し続けた B は暴力に暴力で対抗することに反対し、共通の宗教的使命よりも政治的思惑を優先する人々を非難する。静まり

返る中、投票が再開された。果たして、誰が新教皇になったのであろうか。新教皇は決まった。そして最後の 5 分間に新教皇と L が対話する。その内容は私にとって驚愕であった。新教皇は「確信を持たず常に疑念を抱くもの」であったのだ。その内容を連想することができる者がいるだろうか。すごい脚本だと唸ってしまった。

本作は、現代社会への問題提起に満ちている。本作の前教皇は革新派だったとされ、フランシスコ教皇をモデルにしていると言われている。特に現代社会におけるマイノリティに対する視点に注目したい。どの分野でも女性が男性よりも下位の存在として扱われているのが現状だ。

世界を見渡すと、米国のトランプ大統領然り、ロシアのプーチン大統領然り、中国の習近平国家主席然り、確信を持って自国優先（first）を唱え傍若無人に振る舞っている。日本でも、先の参議院選挙でヒトラーを崇拝すると言われる（？）党首が日本 first を訴え、マイノリティを「敵」とみなし、選挙票を全国からかき集めた。リーダーたる者は「確信」ではなく、「悩み、揺れ動く心を持つ」ことが重要なのだ。本作は、「選挙」という多数決、いわばマジョリティのための仕組みのなかで、マイノリティが重要な役割を果たしていることだ。是非、多くの人たちに本作を視聴して欲しい。

選挙を扱った映画を探すとドキュメンタリーが多い。

日本映画

- ・『選挙』（2007）／監督：想田和弘
- ・『選挙 2』（2013）／監督：想田和弘
- ・『はりぼて』（2020）／監督：五百旗頭幸男・砂沢智史
- ・『なぜ君は総理大臣になれないのか』（2020）／監督：大島新
- ・『れいわ一揆』（2019）／監督：井手洋アメリカの選挙映画

米国の映画

- ・『スーパー・チューズデー ～正義を売った日～』（2011）
- ・『レボリューション ～米国議会に挑んだ女性たち～』（2019）
- ・『グレート・ハック』（2019）